日像上人ゆかりの高題目の起源と継承普及における成果と課題について

中山観能

①高題目の起源

能登地方に伝わる高題目とは、肥後阿闍梨日像上人が帝都弘通の途路に法難に遭遇した際、命を護り世話になった能登の人々との別れを惜しんで、船中より涙ながらに唱えたお題目が起源となっている。

日像上人は、日蓮聖人の入滅の折、帝都弘通を委嘱され、永仁元年（一二九三）二十五歳の時、遺命を奉じて帝都弘通を決意し、所願成就の為に鎌倉由比ヶ浜にて毎夜百ヵ日間にわたり寿量品の自我偈百巻を読誦し、翌年二月満願の後、小湊、清澄、身延などの日蓮聖人の遺蹟を巡拝しながら佐渡に渡り、佐渡の赤泊から能登に渡る為に石動山天平寺の御用船に乗船される。

船中にて天平寺の上首満蔵法印と法論となり、論伏された満蔵法印は名を日乗と改め日像上人の弟子となり、日乗上人の請いに従い日像上人は石動山に登り法華経の教義を説くと真言僧の中から次々と退転する者が現れ、このままでは天平寺が乗っ取られると危惧する者が暴徒と化して、日像上人と日乗上人を亡き者にしようと襲いかかり、追手から逃れて下山するも多勢に無勢已む無く日乗上人の兼ねてからの信者であった、加賀太郎、北太郎が一行の楯となり二俣ヶ原で殉死することとなる。後に加賀太郎、北太郎の菩提を弔う為に西馬場に常在山本土寺（宗門史跡）が建立された。

日像上人一行は日乗上人の叔父である柴原法光の領地の滝谷に逃げのび、暫くの間白山社に参籠して身を隠すこととなる。ほとぼりが冷めた頃帝都弘通のため先を急ぐ日像上人は、旅の道すがら突いてきた槐の杖を地面に指して「若しこの杖より根を生ずることだもあらば、汝この地に一寺を建立せよ」と言い残して、滝谷の地を去ることとなる。その後、幾ばくならずして槐の杖より芽を出し根を生し、日乗上人はこの霊瑞に驚いて、柴原法光の外護を得て法華堂を建立することとなり、これが後の金栄山妙成寺（宗門史跡）となる。

日像上人は、陸路は天平寺の僧侶が待ち構えているので、安全な海路で京都を目指すこととなり、この時日像上人の身代わりとなり命を落とした人達や世話になった能登の人々との別れを惜しみ、涙ながらに船中で唱えたお題目が、哀愁を帯びて波間に揺れて聞こえて来たと言う。この時唱えた別れのお題目が日像上人ゆかりの高題目の起源となった。

日像上人はこの後、無事に上洛し三黜三赦の法難を経て、洛中に建立した妙顕寺が教団最初の勅願寺となり、後醍醐天皇の綸旨を賜わり一乗円頓の宗旨として公認されることとなる。

②高題目との出会い

私が高題目を初めて拝聴したのは、昭和六十二年の四月、石川県羽咋市の長興山本成寺に養子縁組で結婚して入籍後の事だった。

本成寺の寺在所の柴垣町内では、菩提寺で営まれた年回忌法要後に法要施主の自宅で町内の親族や檀徒を招いて法事題目と呼ばれる御講が営まれることが慣例となっており、私が住職の代理で勤行の導師を務めた時、読経と読経の合間に奉唱された高題目を初めて聞くこととなった。

高題目の出だしの一節を御講に参集した檀徒の一人の代表が発声し、団扇太鼓を数人で奉打しながら高題目を唱和

していく。能登で初めて聞く高題目の音調に圧倒されながら暫らく聞き入っていたが、高題目は六返かえしと言って繰り返して唱和する部分があり、繰り返しの合図や題目を止める合図に気をつけていないとお題目や団扇太鼓が不調和となってしまう。高題目を止めるのは導師の合図によるので、高題目の慣れない節回しに緊張しながら恐る恐るリンを奉打して間違わないように止の合図を出したのを今も覚えている。

高題目を奉唱する時の様々な決まり事に慣れて、高題目を正確に唱えられるようになるには幾度も場数を踏む必要があることをこの時知った。

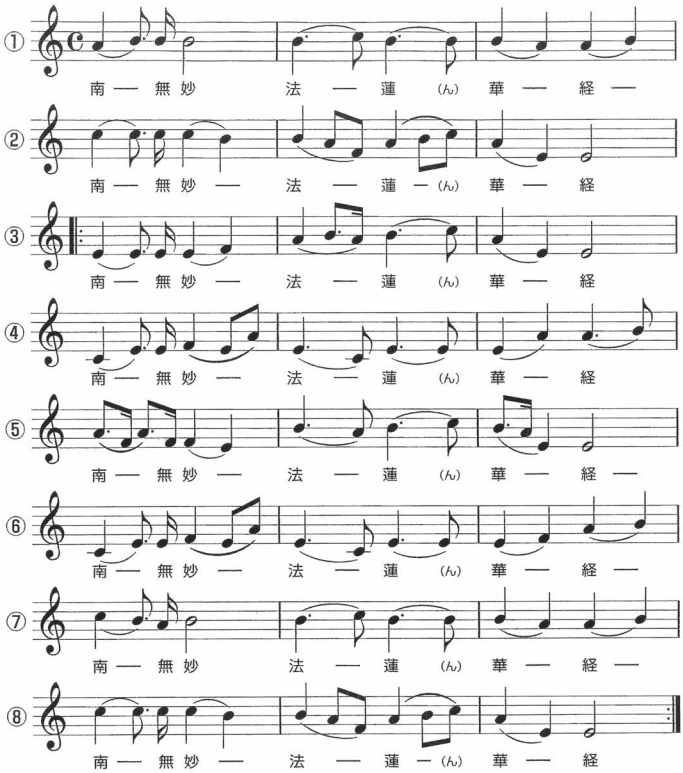
③高題目の伝承について

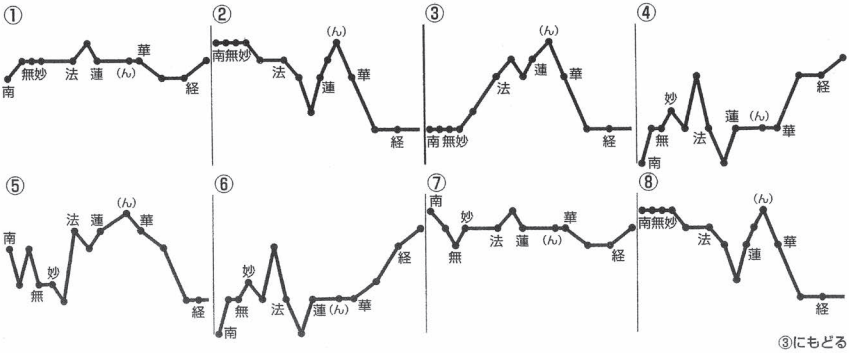
日像上人ゆかりの高題目は、別れの題目として能登法華の檀信徒の篤信者にによって七百三十年間に渡り今日まで伝承されて来たが、不思議なことに節回しを示す楽譜などは一切存在せず、人から人へと口伝に伝わっていることが高題目の特徴でもある。団扇太鼓を奉打しながら哀愁を帯びた音調で抑揚をつけて高く張り上げるように唱えたり浮き沈みするようなリズムで唱えて、六返かえしと言われ繰り返し唱える形となったのは何時頃かは定かではない。

高題目の唱法を説明すると、抑揚あるお題目の唱え方が、八パターン（①～⑧※立教開宗七百五十年慶讃高題目楽譜参照）あり、楽譜の①～⑧までのお題目を一度通して唱えたあと、③番目に戻り、③～⑧までの六遍を繰り返す。故に「六遍返しの高題目」と言われ、この抑揚のなかで、音を高く張り上げるところがあるため「高題目」と呼ばれている。

現在高題目が奉唱される場として、主に石川県第二部宗務所管内の各寺院の年中行事、特に御会式や彼岸法要、祠堂法要や魂迎会等の永代供養会、葬儀、法事の際。また管内の十数ケ所の在所で営まれる各種の御講の勤行で唱えられている。

立教開宗750年慶讃高題目





然しながら、少子高齢化が進む社会情勢の中で、今後将来に向けて高題目を伝承させて行く為には創意工夫が必要と思われ、管内の伝道布教の一環として高題目の継承普及の為の事業を展開をすることを宗務所伝道機構の伝道局にて申し合わせをし、高題目を顕彰する為に立教開宗七百五十年慶讃事業として、高題目を伝え残す十ケ所の在所の音源を基に統一の楽譜を制作し、立教開宗七百五十年慶讃高題目として平成十四年の管内の慶讃大会において参加者一同で奉唱した。

その後、高題目の継承普及するために十年前より石川県第二部宗務所の伝道局事業の一環として高題目継承普及プロジェクト部門を立ち上げ、高題目音源を収録し、立教開宗七百五十年慶讃高題目の楽譜付きのＣＤを五百枚を制作し、管内寺院及び檀信徒に販売して完売しており、宗務院伝道部にも伝道資料として提出した。

平成三十年八月三日には宗務院伝道部所管事業の月例金曜講話にて高題目の継承と普及について講説し、同伴した本成寺の檀信徒十名と共に宗務院講堂の御宝前にて高題目を奉唱披露した。

更には、年に三回羽咋地区・七尾地区・奥能登地区の三地区の当番寺院において、立教開宗七百五十年慶讃高題目の楽譜をテキストにして、音楽教師を講師として高題目講習会を開設し、管内檀信徒を対象に高題目の継承普及を図り指導者の育成を試みるも、令和二年の新型コロナウイルスの蔓延に伴い、高題目講習会は現在まで休止を余儀なくされている。

④高題目継承普及の課題

現在の管内において高題目を唱えることの出来る檀信徒の高齢化が進み、更には新型コロナウイルスの蔓延と令和六年元旦に発災した能登半島地震及び同年九月の豪雨被害により復旧復興を余儀なくされている管内寺院や檀信徒のおいて、高題目を奉唱する場が失われて行く状況下で、如何にして高題目を継承し普及していくことの出来る人材を

確保するかが管内の喫緊の課題となっており、早急にその手立てを講じる必要に迫られるている。

これまでは、檀信徒の篤信者により受け継がれてきた高題目だが、今後は管内教師が率先して高題目の唱え手として指導者となり高題目の普及に当たることが望まれる。更には、高題目を唱える場づくりに傾注することが急務で、各寺院の年中行事や檀信徒の葬儀や法事などあらゆる場面で高題目の奉唱を試みることが必要と考える。

⑤高題目の宗門史上の価値

高題目の起源を辿る時、日像上人ゆかりの高題目は、帝都弘通の途路に能登開教を行い法難に遭遇するも、殉教の信徒や外護の信徒に命を守られその人々との別れを惜しんで唱えた題目は、日像上人の生きた命の証であり、もしも七百三十年前に日像上人が能登の地で落命していたなら、現在の日蓮宗の興隆は無い。故に、日像上人の命をお護りした人々の末裔である能登法華の篤信者が唱える日像上人ゆかりの高題目は、日像上人の生きた証であり、日像上人の命そのものであって、能登に伝わる無形の財でもある。

能登に住み日像上人ゆかりの高題目を継承し、弘めようとする僧侶と檀信徒は、仏の使いである地涌千界の菩薩の自覚を持ち、お題目による下種結縁の担い手として未来に向けて高題目の継承普及に努めて行くことを期待すると共に、七百三十年間に渡り一度も途絶えること無く能登に伝わる高題目こそ、今日の宗門発展の基を創られた日像上人ゆかりの文化遺産であり無形の宝であることを述べて顕彰の一助としたい。